

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18730502  
 研究課題名 (和文) 近世人間形成に果たす宗教メディアの意義  
 —地域文化センターとしての寺院に着目して—  
 研究課題名 (英文) A Study in Cultural History of Human Development and Buddhist Religion  
 in Early Modern Japan  
 研究代表者  
 梶井 一暁 (KAJII KAZUAKI)  
 鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授  
 研究者番号：60342094

## 研究成果の概要：

近世寺院や僧侶に関する教育史的研究を試みるため、地域文化センターとしての寺院の性格に着目し、村の知識人や教師として僧侶をとらえる視座から考察を進めた。

町や村に住し、人びとが関係を切り結ぶ末寺僧侶が、その多くはかつて京都や江戸の仏教学の中心的教育研究機関で学んだ経験をもつ者であったことを明らかにした。

末寺僧侶が都市修学経験者という外部とつながる文化的外部性を備えることが、村や町における僧侶の知識人や教師としての文化性や権威性の背景を形成した。町や村をこえてネットワークを形成する庶民も成長しつつあったが、僧侶は都市の学問や文化とより深部において接しうる存在であり、その経験を通じて彼らが外部から町や村に運びいれる文化や学問の性質は、庶民のそれとは一定程度異なったことを明らかにした。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,800,000	0	1,800,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	210,000	3,410,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育史、近世、寺院、僧侶、メディア

## 1. 研究開始当初の背景

教育史研究は、近世日本の寺院や僧侶に関する考察について、必ずしも豊かな蓄積をもっていない。それは、これまでの教育史研究が、教育の範囲を狭くとらえる傾向のあったことと関係しているのではないだろうか。いうまでもなく、教育に関する営みは、政治、

経済、社会、文化、宗教、生活など、さまざまな要素とかかわりあうなかに成立している。その様相はとりわけ近世において顕著である。

従来の教育史研究における近世社会の学校の施設への関心は、藩校、私塾、手習所などの分析を著しく進展させ、近世教育史研究

の主要なテーマとなった。一方、寺院や僧侶に関するテーマは、未開拓のままであるといわざるをえない。

人々の信仰や儀礼を支え、教団や教義を形成する寺院や僧侶は、教育史の問題というよりも、宗教史や仏教史の問題として関心がはられるだけのものであるか。否、教育史研究の角度から、寺院や僧侶に光を当て、その教育史的意義を明らかにしようとするのが本研究である。

## 2. 研究の目的

本研究では、村の寺院に住する僧侶を単に教化者や信仰者としてのみとらえるのではなく、村の教師であり知識人であったその特質に着目する。これにより、近世寺院のいわば地域文化センターとしての性格を照射したい。寺院という場に入るとが寄り、僧侶という知識人と関係を切り結ぶとき、そこに信仰的な関係が認められるだけではなく、文化的学習的な交流の契機もまた生じたはずである。中間にあって作用するものがメディアであるとすれば（今井康雄『メディアの教育学』東京大学出版会、2004）、寺院や僧侶というメディアを媒介し、どのような知が人びとに伝達され、人間形成にどのような作用を果たしたのであろうか。この様相の一端を、地域文化センターとしての寺院の性格を明らかにするなかに描き出すことが、本研究の課題である。

## 3. 研究の方法

研究視角として、近年の社会史や文化史の動向をふまえ、地域文化センターとしての寺院、地域知識人としての僧侶という視角を設定する。

研究資料について、末寺所蔵資料として、瀬戸内地域や北陸地域を中心に寺院文書の調査と未発表資料の発掘を進めた。また、本寺資料として、本寺に附設される僧侶教育・教学研究機関の資料を分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 都市の機関に学ぶ僧侶

幕藩体制のもと、本末制と寺檀制の確立が進んだ。町や村の寺院はそれぞれ本寺（本山）をもつ末寺となり、末寺に住する僧侶は寺檀関係を基盤に入びととさまざまな関係を切り結ぶようになる。仏教諸教団で末寺僧侶の養成教育が課題となる。教団別の僧侶養成教育が組織的に行われるようになった。諸教団の僧侶教育機関は、それぞれ学寮、学林、檀林などと称され、本寺に附設されたり、関係寺院がその機能を担ったりした。それらはいわば本山学校や宗門学校の性格をもち、仏教の教育研究の中心機関として役割を果たした。

安芸国賀茂郡の森近村の随泉寺（浄土宗）や檜原村の西福寺（浄土真宗）などの事例を検討し、町や村に住む末寺僧侶が、そのすべてではないけれど、多くはかつて京都や江戸の仏教学の中心的な教育研究機関で学んだ経験をもつ者であったことを明らかにした。

### (2) 僧侶の文化的外部性

辻本雅史氏（辻本・沖田編『教育社会史』山川出版社、2002）が指摘するように、末寺僧侶は単に信仰者や教化者の側面においてのみ役割を担う存在ではなく、町や村の知識人や教師でもあった。末寺僧侶がまとうその教師性や権威性は、彼らが京都や江戸の本寺をもち、そこでの修学経験を有するという、学問や文化の中心地である都市とつながる文化的外部性を備えることと関係した。

留意すべきは、近年の近世地域社会論が指摘するように、庶民が町や村をこえ、経済、信仰、文化などの諸側面で広域的なネットワークを形成していたことである。庶民も外部とのつながりをもっていたとすると、僧侶のそれとはどう関連するのか。

越中国射水郡氷見町を事例に考察した。氷見町人の田中屋権右衛門の日記から、彼のつきあいが広く町の内外におよび、僧侶との交流も頻繁であったことがわかる。権右衛門と僧侶は信仰を契機に交わったり、ともに詩画をたのしむ仲間であったりした。庶民と僧侶が交流の接点をもつ。さらに僧侶は、本山とのつながりを有し、修学、寺格昇進、学階昇進など、さまざまな機会に上京した。上京の機会には僧侶に限らず、少なくない庶民が本山参詣や観光、あるいは商用などで上京を果たすようになっていた。出版物を通じて都市の情報を得る庶民もいた。都市を知る庶民が登場していた。このように、僧侶も庶民も都市という外部とのつながりを有する存在であるなら、何が僧侶を庶民とはある程度隔たった存在として文化的に権威づけるのか。

権右衛門と交流のあった氷見町の円満寺（浄土真宗）の義淳と義僧に着目した。ふたりは京都の西本願寺学林に十数年以上にわたって修学した経験のある僧侶であった。義僧は上京の機会に西本願寺門主から詠歌を賜う機会を得た。氷見に帰郷した義僧から門主の詠歌をみせてもらった権右衛門は、その印象を日記に書き残している。ここから瞥見されるのは、庶民と僧侶がもつ外部との文化的つながりの性質の違いではないか。僧侶は都市の学問や文化とより深部において接しうる存在であり、その経験を通じて彼らが外部から町や村に運びいれる文化の濃度は、庶民のそれとは一定程度異なると考えられる。

僧侶も庶民も外部とのつながりをもつ。その有無にとどまらず、つながりの中身が検討

されなければならない。地域社会論を視野にいれながら、僧侶と庶民の交流の重なりと、それぞれが切り結ぶ交流の独自性を検討する必要があることを、課題として指摘した。

### (3) 寺院の地域文化センター的機能

さまざまな契機に寺院という場到人びとが寄り、僧侶という知識人と関係を切り結んだ。そこに信仰的な関係とともに、文化的・学習的な交流の契機も生じた。寺院を利用して手習や学問が教えられたことはもちろん、氷見町の円満寺や上日寺(真言宗)などの事例から認められるように、寺院は芸能興行や行楽の場となった。また、僧侶が本山参詣の引率者として人びとの旅を案内したりした。寺院は蔵書も形成した。蔵書形成について、阿波国撫養郡高島村の昌住寺(浄土宗)の事例を分析した。

メディア史の観点から、僧侶の庶民教化の側面もやはり留意されなければならない。尾張国名古屋の興正寺(真言律宗)の事例について、阿部英樹氏の教示を得て(阿部『江戸時代の八事山興正寺』勁草書房、2008)、同寺で往生要集の講談を行うため、堂の横に庇を拡張したことに着目した。同寺で積極的な庶民教化の取り組みがあり、参詣者の獲得に意欲的であったことがわかる。僧侶が講談という語りの方で庶民に接近しようとしていた事例といえる。僧侶による語りの教化を分析することは、従来の研究で示される儒者や心学者の教化の特質を明確化する視角を与える作業ともなる。

### (4) 展望

近年、寺院や僧侶に関する教育史的研究の必要が、教育の社会史やメディア史の成果から示されている。末寺僧侶が有する地域の知識人や教師としての性格を明らかにするため、教育史をはじめ、仏教史や教団史、近世史や地域史など、関連分野の研究成果を交差させる作業が強く求められる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 梶井一暁、近世教育史研究の課題と展望－寺院・僧侶を中心に－、日本教育史研究、27、pp.65-82、2008、有
- ② 梶井一暁、近世僧侶の農民子弟の学習活動へのかかわり－安芸国広島藩領賀茂郡黒瀬組の事例－、鳴門教育大学研究紀要、22、pp.24-36、2007、無
- ③ 梶井一暁、木村政伸『近世地域教育史の研究』を読んで、日本教育史研究、26、pp.102-108、2007、無

- ④ 梶井一暁、木内陽一、中山知富、岡田廣純、高島と土佐泊の「師匠塚」、鳴門教育大学学校教育研究、22号、pp.1-4、2007、無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- ① 勝部真人、阿部英樹、長谷川博史、下田路子、梶井一暁、黒瀬町史・通史編、東広島市黒瀬町、pp.283-306、2008

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ

<http://www.naruto-u.ac.jp/~kkajii/home/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

梶井一暁 (KAJII KAZUAKI)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60342094

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし